

母校への愛着 ひしひしと

結果的に解体は避けられなかったが、アントニン・レーモンドの初期作品2棟にかかわる活動は、その規模や取り組みの真剣さにおいて、近年まれにみる本格的な保存運動であった。何よりも、卒業生を始めとする関係者の母校への愛着が第三者にまでひしひしと伝わってきたことは、歴史や文化といったもののほかにも建築の価値を高める要素があるのだと強く感じさせてくれた。

両

建築物の保存を
考える上で、避け
られない課題が経
済性と安全性だ。



喪われたレーモンド建築

東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会編著

時代とともに建築物の使われ方は変わる。ときには新しい時代にあわせて施設のあり方と、歴史的・建築的価値が相反する事態も起こる。そこで、建て替えたい者と残したい者の双方の対話が必要となる。思いを貫き通すことは当然、大事なことだが、相手の意見に耳を傾けることなしに解決策は見いだせない。一方、安全性については、これだけ耐震技術が高度化していることを踏まえれば「危険だから壊す」という常とう句に、以前ほどの破壊力はなくなっているはずだ。

同書には、東京女子大学東寮・体育館の保存運動のすべてが描かれている。どこかのタイミングで特別な活動をすれば保存が実現できたのか、または最初から勝ち目のない運動だったのか、その答えを出すことはできない。しかし、多くの人が参加したこの活動が、両建築の歴史の一部となったことは間違いない。

工作舎・2520円(税込み)。

喪われたレーモンド建築―東京女子大学東寮・体育館